

平成 21 年度大台ヶ原自然再生推進計画評価委員会

森林生態系部会

動物モニタリングワーキンググループ

議事概要

◆ 日時：平成 22 年 1 月 8 日（金）15:00～17:20

◆ 場所：春日野荘 高砂

◆ 出席者

<委員>

井上 龍一 奈良教育大学附属小学校 教諭
川瀬 浩 日本野鳥の会奈良支部 支部長（欠席）
日比 伸子 橿原市昆虫館 資料学芸係長
前田 喜四雄 奈良教育大学教育学部附属自然環境教育センター 教授
村上 興正 元京都大学 講師

<オブザーバー>

広渡 俊哉 大阪府立大学大学院 生命環境科学研究科 准教授

<事務局>

環境省近畿地方環境事務所	上村 邦雄	野生生物課長
	角 智則	自然保護官
(株) 環境総合テクノス	樋口 高志	環境部リーダー
(財) 自然環境研究センター	永津 雅人	第 2 研究部長
	岸本 年郎	首席研究員

◆ 議事

- (1) 平成 21 年度動物モニタリング業務報告（案）について
- (2) 平成 22 年度動物モニタリング調査計画について
- (3) その他

◆ 議事概要

○委員等からの主な意見等

(ガ類調査について)

・ライトトラップで採れた昆虫全体の量がわかると、例えばそれを捕食するコウモリとの関連が分からないか。

→サンプリングバイアスが課題となるだろうし、利用できる餌の量を推定するのは困難

と思われる。

・その地点に確実に繁殖しているということでは、幼虫の調査を実施するのが望ましいが、できないか。

→不可能ではないが、悉皆的に調査するのは、努力量が非常に大きくなってしまう。ある群に着目して調査をするのは良いかもしれない。モグリチビガ等、下層植生のリーフマイナー（葉に穿孔する群）は候補となると考えられる。

・ガ類の群集の構成は5年前の2004年と本年でずいぶん変化しているのだが、この変化は何を示しているのかを特定の種や種群に注目して個体群動態を見るなどで把握できないか。

・個体数変動が多いときには対数変換して解析した方が良いかもしれない。

・5年に一度ではなく、小規模にでもデータを継続的に採り続ける方が科学的には望ましい。

・植生タイプIV（トウヒークケ密型植生）でも5年前とずいぶん種構成と比率が変化している。特に地衣類食の種の減少が目立つ。これは植生タイプIVは植生の広がり小さいため、周辺の植生のガ類が集まってきていることを示している可能性がある。

・今後整理すべき点として、ガ類の食性ごとの整理を行うこと、優占種のみを比較を行うこと。

（両生類・爬虫類調査について）

・爬虫類・両生類については減ってきているのは間違いないが定量できていない。

（今後のモニタリング調査計画について）

・両生類調査、爬虫類調査については毎年、漫然と無目的に調査するのではなく、数年に一度4月～6月の間にしっかりとした調査を行うことが望ましい。調査方法を検討する。

・第2期計画のモニタリング行程については、各年度に均等に配分しつつも、予算の関連上、削減できるところは削減する。

・地表性小型哺乳類の繁殖については調査項目に加える（※事務局追記：過去の調査でも妊娠状況についてのデータは取っていたので、これまでの情報もある）。

[文責：近畿地方環境事務所]